慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	チョボ鼓とトゥンラム鼓
Sub Title	
Author	近森, 正(Chikamori, Masashi) 市原, 常夫(Ichihara, Tsuneo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1979
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.49, No.2/3 (1979. 6) ,p.143(253)- 145(255)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19790600-0143

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

チョボ鼓とトゥンラム鼓

近森　正
市原常夫

松本信広先生によってラオス鼓、ネルソン鼓の系列に属する古式の銅鼓のひとつにあげられたものにチョボ鼓がある(図2)[1]。この銅鼓はヴェトナムのホアビン省、チョボ村より出土したといわれ、かつてのフランス極東学院の所蔵品であった。鼓面の径が五一・五cm、高さが三七・八cmある。鼓面は中央に十六分光の星形文を配し、その外側に捩り文、雷文、縦線文などの文様帯をそれぞれ同心円状にめぐらす。頭部は大きく膨らみ、表面は全く銹化して文様がみられない。胴部は下方に大きくひろがり、さらに外に開いた低い脚部につながる。胴部に施された文様は、斜三角文、小円をもつ縦線文、捩り文などである。この銅鼓については、すでに梅原末治博士が「一見古拙な外観を呈するもの」として言及しているが[2]、たしかに形態、文様ともにヘーゲル第一型式にはみられない特異なものと言わなければならない。このように大きく突出した頭部、すそ拡がりの胴部と薄い脚部をもつ形態は、かつてV.Goloubewが銅鼓の起源と伝播を論じた論文の中で、原始的第一型式銅鼓（Tambour de bronze du type I primitif）として図示したルイ・フィノ博物館の標本（詳細な記載なし）にみられ(図1)[3]、また近年、中国の雲南省祥雲大波那木槨銅棺墓や同じく雲南省楚雄県万家塤古墓群[5]から出土した銅鼓に共通した特徴である。中国雲南省出土のそれらの銅鼓が放射性炭素年代測定の示めすところによって紀元前五世紀から七世紀にさかのぼり、容器である銅釜から発展したも

のであることを示唆する点は、この型式が銅鼓の起源について重要な意味を持つと考えさせる。

ところで一九七五年にハノイで出版された『ヴェトナム発見のドンソン型銅鼓』[6]は、三十三点の新資料を含む五十二点の銅鼓の集成を行なっているが、その中でトゥンラム（Tùng Lâm）鼓として記載されている銅鼓が、上記のチョボ鼓にきわめて類似するものとして注目される。（図3）これは従来その名称が知られていなかったもので、その説明によれば、一九三二年ヴェトナムの Hà Đông 省、Mỹ Lương 村、Tưng Lâm 寺付近の畑で発見され、現在ヴェトナム歴史博物館に所蔵されているという。この銅鼓がすでに仏領時代に発見されているにもかゝわらず、従来の報告にあらわれなかった点に疑問があるが、チョボ鼓と比較して両者がよく類似することから、もし、これがはじめて公表されたものであるならば、古式銅鼓の標本として新たに貴重な資料を追加することになる。

早速、ハノイの歴史博物館にその趣旨を知らせ、調査を依頼したところ本年二月、同博物館の副館長 Vũ duy Đê 氏より親切な回答が寄せられた。それによって以下の諸点が明らかになった。すなわち、チョボ鼓とトゥンラム鼓は思いのほか、全く同一の銅鼓であって、従来チョボ鼓の出所由来を記述したものの方に誤りがあり、それがハドン省トゥンラムの出土品でなければならないこと。さらに、V. Coloubew が図示した銅鼓もこのトゥンラム鼓に間違いないこと。また、チョボ鼓という名称をもつ銅鼓は、他に別の標本がハノイの歴史博物館に収められており、それが従来フィセ鼓と呼ばれていたものであることが判明した。何故このような混乱が生じたのか理解に苦しむが、当事者による正式な報告を欠いていたことがその一因ではなかったか。銅鼓編年上に重要な意味を見出しつゝあるトゥンラム鼓（チョボ鼓改め）の資料利用について、こゝに訂正を加えておく。

註

（1）松本信広「古代インドシナ稲作民宗教思想の研究—古銅鼓の文様を通じてみたる—」『インドシナ研究』一九六五、および『日本民族文化の起源』第三巻、一九七八に再録。

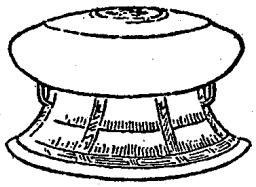
（2）梅原末治「南方アジアの銅鼓」東方学論集、一九六二。

(3) V. Goloubew "Sur L'origine et la diffusion des tambours métaliques" Communication Présentée au Premier Congrès des Préhistoriens d'Extrème Orient 1932.

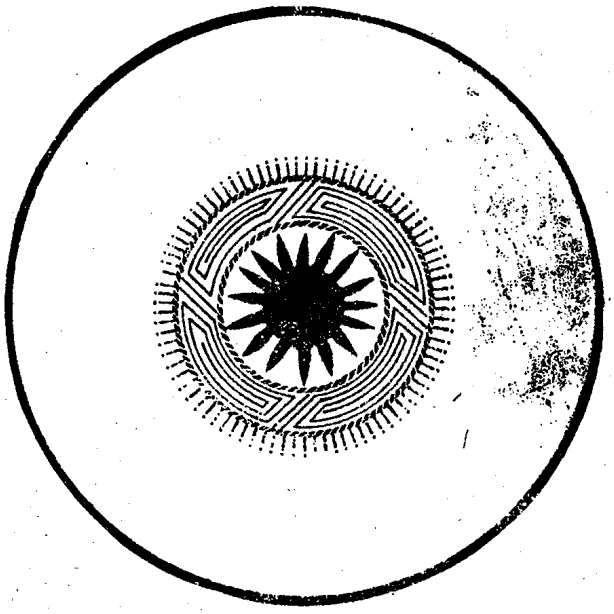
(4) 雲南省文物工作隊「雲南祥雲大波那木槨銅棺墓清理報告」考古一二、一九六四。

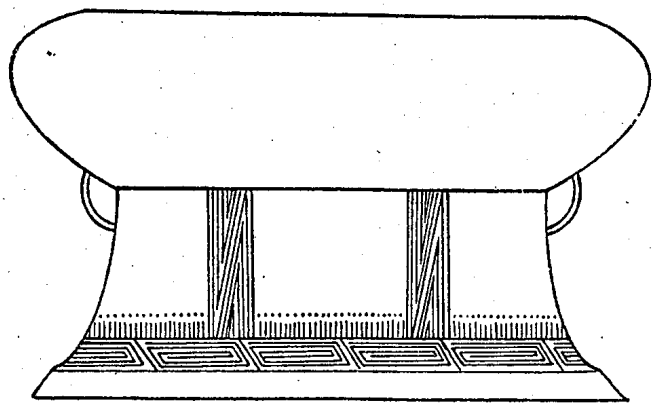
(5) 雲南省博物館文物工作隊「雲南省楚雄県万家垻古墓群発掘簡報」文物一〇、一九七八。

(6) Nguyễn văn Huyên, Hoàng Vinh "Nhữ'ng Trống Đồng Đông són Dã Phát Hiện ở Việt Nam" 1975.

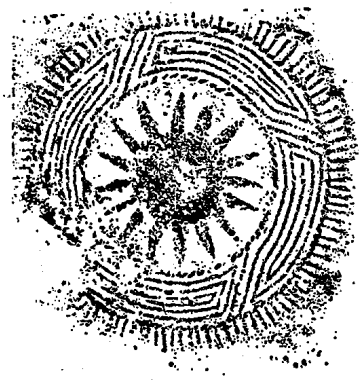


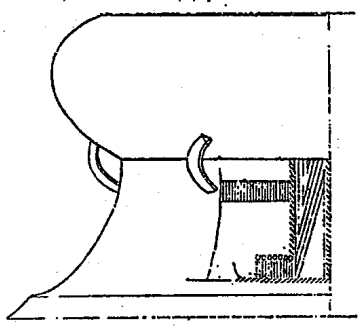
1. V. Goloubew のいわゆる原始第一型式銅鼓
V. Goloubew (1932)





3. トランラム鼓
Nguyễn Văn Huyên et al (1975)





2. チョボ鼓 松本 (1965)